

「ジェーンズ邸」

ジェーンズ邸の創建は明治四年（一八七一年）といいますが、今から約百年前ということになります。

この建物は全国で最も古い洋館の一つで、もともとはその頃できた熊本洋学校の教師、L・Lジェーンズの住宅として

今の第一高校のあたり建てられたのですが、そのあと水道町に移されたのでした。

明治九年にジェーンズがアメリカへ帰り、翌年西南の役がおこると、征討総督の有栖川宮熾仁親王が、ここに本営を置きました。

西南の役では熊本城の攻防や田原坂の戦いなどで敵味方とも多くの死傷者を出しましたが、当時元老院議員をしていた佐野常民が、外国の赤十字社にならって、博愛社という



ものをつくり、これらの戦傷病者を救おうと企てました。
味方はともかく敵まで救うのはおかしいなどと反対する者もありましたが、人道主義が勝ちを制して、明治十年五月、有栖川宮がこの家で博愛社の設立をお許しになり、早速実動に移りました。これが今の日本赤十字社のおこりです。
この記念すべき家は、日本赤十字社記念館ともなっていて、現在は水前寺公園の裏に移されています。

民話



オタツの墓

坂本村久多良木

馬場 継治

坂本村百済来地区には中世古城跡と呼ばれる山城が八カ所も点在し、今もなおその遺構を確かめることが出来る。この話は其の一つ、羽仁田城にまつわるもので、城跡の北側、川をへだてた山すその夏草の茂った田んぼの傍に一基の古墓が寂しく残っており、これを村人は「オタツの墓」といい、今もなお衰れな話が語り伝えられている。

また古老の話によれば、昔は付近の田んぼに野良仕事に行き、日暮時ともなれば、どこからともなく「渡してくれ、渡してくれ」と哀願する悲しい声が聞こえて来たもので「オタツ女の声がする」といい、気の弱い者は背筋がズーンとして、早々に家にたち帰ったものだといふ。今でも時折り墓の付近に不思議な灯がともって居るのを見たという人が居るが、おそらく灯がともる晩は「オタツ」の命日に当たるのではなからうか。

う。城下の村里に「オタツ」という黒髪豊かな美貌の女がいた。時の城代某は「オタツ」の美貌に心ひかれ城に召し使え、我が意に従えようと手を替え品を替えて口説いたが「オタツ」はどうしても色よい返事をしなかった。

そこで「いとしさ余って憎さが百倍」恋に狂った城代は、武士の意地も手伝って遂に「オタツ」を一刀の下に斬り殺し村なかの畑に埋めてしまった。

悲業の死をとげた「オタツ」は成仏する事が出来ず、其の後亡霊となり、夜な夜な村里をさまよい歩いて城代を悩まし、又村人も気味悪がった。そこで城代は、村人に命じて墓を掘り返し、人里はなれた川向かいの山裾に埋め替えてしまった。それからというもの「オタツ」の亡霊は川を渡ることが出来ず、怪しげな灯が川に添って行ったり来たりして、再び村里に姿を現わす事はなかったといふ。

地方の言葉を

もっと大切に

劇作家 木下順二さん

昔の東京の風情がまだ残っている、文京区向ヶ丘の自宅、板塀に囲まれた静かな庭内には、目にしみるようなアジサイが咲いていた。

「全国のいろんな所にあるいい言葉は、もっと大切に保存したいものです。そうしたら日本語はもっと豊になると思いますよ。」

日本の言葉、特に「地方の言葉」について話されるときは木下さんの声には一段と力がいり、目は輝いていた。そこには、「地方の言葉」に対する深い愛情すら感じられた。現在も元気に本業の「劇作」にとりくんでおられ、今秋には新作が発表される予定である。

五名市伊倉出身。熊中・五高・東大英文科卒。大正3年8月2日生れ63歳。主な作品には「夕鶴」「風浪」「日本民話集」等がある。現住所は東京都文京区向ヶ丘2-23



この人と30分

このコーナーは県出身者で各界で活躍しておられる方々を紹介するとともに、県政への提言などをお聞きするものです。

鼻に抜ける

生れはこのそばの本郷なんです。親父の親代々が玉名市の伊倉なんです。昔は早かったんですね。親父が五十位で隠居したんです。それで僕が小学校四年の時でした。熊本に持っていかれて白川小に入り、五高を出るまでいました。小学生時分、言葉で非常にいじめられました。「私が」という時の「が」が鼻に抜けるというね。それから今も記憶にあるのは「今日は先生が来とんなはらん」といえばよかったのを「今日はおらっさん」といったんですよ。熊本弁がまだ中途半端でね、敬語が足りないといつてやられました。

熊中に入った頃には必死になって覚えましたから、全く他の生徒と同じにしゃべれましたね。今の熊本の若い人の熊本弁よりは、もっと、ちゃんとした熊本弁をしゃべれますよ。

熊中の時には、うさぎ狩りが盛んでしてね、三里木あたりに出かけてました。当時、三里木あたりは、雑木林の山というか、丘がいっぱいあったんです。網を棒のように地面に置いて、それを靴で踏んで上に引っ張り上げ、囲んだところに勢子がチョイチョイと追いつ込んで、せいぜい五、六羽でした。翌日、